

色彩幻想

平成 22 年 11 月 6 日 (土)～平成 23 年 2 月 20 日 (日)

休館日／月曜日 (祝日の場合は翌火曜日休館)

12 月 27 日 (月)～1 月 5 日 (水)

開館時間／午前 10 時～午後 4 時 30 分 (入場は午後 4 時まで)

入場料金 *括弧内はリピーター料金

大人 800 円 (600 円)	大学・専門学生 600 円 (400 円)
中高生 400 円 (200 円)	小学生 200 円 (100 円) 幼児無料

関口雄揮記念美術館

「響き合う色を求めて」

自然を見て人は心に感動する その感動こそが画面を構成してゆく
色も形もリズムにのって動き出す 色彩は感覚によって支配される
色は互に響き合ってバランスを保ち乍ら一つの絵ができる

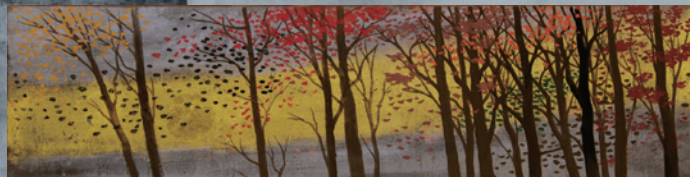
関口雄揮

関口の作品の特徴のひとつとして、写実的な描写と幻想的な彩色との融合が挙げられる。幼少期には日展の洋画家古川弘（1907-77）の指導を受け、学生時代には親交のあった安井曾太郎（1888-1955）にデッサンの重要性を説かれた関口は、早い段階から作画の根底に洋画的な写実主義を育んでいた。他方で、フランス留学からの帰国後、60年代初期の抽象の実験によって関口は、風景のなかに赤、青、緑といった原色を配し、幻想的な画面をつくりあげる方法を確立していった。その後、70年代に入ると細部の描写をさらに徹底すると同時に、北海道の風景体験の影響から白と黒という新たな色彩を獲得。写実的な描写と幻想的な色彩が織りなす独特の作品世界を築き上げてゆく。

とりわけ色彩の問題は、上の言葉にもあるように、関口の重大な関心事であった。各部に配される原色は他の色を引き立てながら複雑に響き合い、非現実的でありながらも不思議と違和感なく溶け込み、絶妙なバランスで幻想的な世界を構築する。本展ではこうした関口独自の色彩とその方法に着目し、彼の作品を見つめ直してみたい。

第二展示室

関口は、日本の自然が最も色彩に溢れる季節として、秋をこよなく愛した。その象徴的な作例として永観堂画仙堂障壁画の小下図と、各地の多彩な秋の風景を描いた作品を併せて展示、紹介する。



《樹間》（画仙堂障壁画小下図）1998年

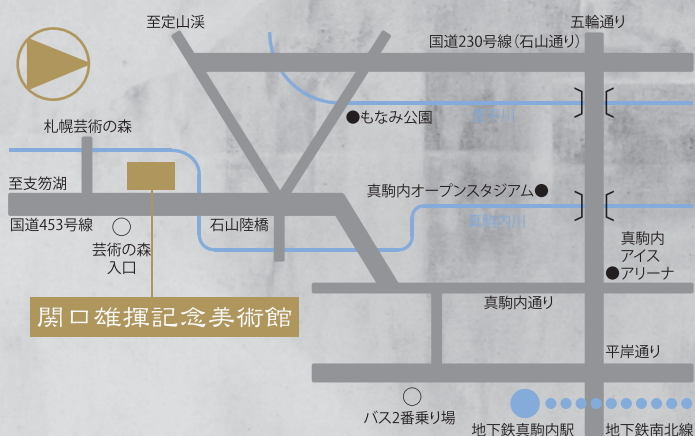
第三展示室

フランス留学時代のスケッチを紹介する。同時期は、関口の色彩感覚が最も研ぎ澄まされた時期である。その作品には、初めて目にする異国の風景への好奇心とともに、色彩への欲求が溢れんばかりに表されている。



《台北》（留学期スケッチ）1954年

周辺地図



交通

■地下鉄・バスをご利用のお客様

地下鉄南北線「真駒内」駅バス2番乗り場より中央バス乗車「芸術の森入口」下車（所要時間14分 約15分間隔で運行）真駒内方面に徒歩1分

■お車をご利用のお客様

札幌市街中心部より国道453号線を南下支笏湖方面に約40分

関口雄揮記念美術館

〒005-0853 札幌市南区常盤3条1丁目（芸術の森入口）
TEL 011-593-5050 URL <http://www.sekiguchi-muse.jp/>